あたらしい児童文学の創造

早船ちよ
井野川潔　共編

兒童文学の創造

早船ちよ
井野川潔　共編

評　論　社

新しい児童文学の創造

昭和44年9月10日　初版印刷
昭和44年9月20日　初版発行
¥320

著者　早船ちよ他

発行者　竹下みな

印刷所　三倉印刷
製本所　有限会社友晃社製本

発行所　株式会社　評論社
東京都千代田区神田神保町2ノ16
電話代表(265) 1961
振替東京 7294

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。　(A−1)

まえがき

日本の子どもたちに、よい児童文学をあたえよう。

太陽と、緑の大地が、子どものからだの成長に必要なように、よい児童文学・よい児童文化が子どもの心の成長には、欠くことのできないものです。

いま、子どもをとりまく、日本の現代的状況は、こわいもの・危険なもの・有害なものばかりが多いようです。空気はスモッグで汚れ、道路は安心してあるける道はなく、食　は有毒色素や防腐剤が過剰にまじっており、子どもの遊び場はなくなってしまっています。

いま、子ども目あての雑誌も、コマーシャリズムのひどい週刊誌の横行で、良心的な良い雑誌は、とうにみんなつぶれてしまいました。そういうなかで、ほんとうに子どものためによい児童文化やよい児童文学を与えようという良心的なしごとが、あちこちで、少しずつ進められています。

わたしたちの「児童文化の会」のしごと、そして、わたしたちの児童文学の『新児童文化』作品集のしごとも、その一つです。まだ十年になるか、ならないくらいの、ほんのみじかい経験でしかない、小さいしごとです。それは、はじめ数人の集まりで出発しました。いま、ようやく会

員が百八十人をこえるほどになった、そしてわたしたちの作品をのせる機関誌は五千部発行にまでこぎつけた、という、まだ小さな児童文化運動なのです。しかし、わたしたちは、これまでの経験から、確信をもって、未来に大きな希望と明るい期待をもつことができました。

日本中には、わたしたちとおなじように、子どものためを考えて、よい児童文学やよい児童文化を生みだすために、いろいろの努力をしている人たちが、たくさんいるのだ、という確信です。

それは、子どもを持っている、おかあさん、小・中学校の教師、学生、幼稚園・保育園の保母さん、そして一般市民のなかの有志などです。

そういうわたしたちは、昨年の夏に集まって、児童文学講座を開きました。それは、ひとにものを教えるためではありません。じぶんが、いちばん真剣に考える問題や、ぶち当たった問題について、みんなでいっしょに考えよう、というのがわたしたちの会のやりかたなのです。

それが、この「新しい児童文学の創造について」の問題なのです。あなたも、この本によってそれに参加して、いっしょに考えてください。なかなか重大な、そして、あなたにも興味と関心を持たれる問題だと思います。

一九六九年　八月　　編　者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

もくじ

はしがき

Ⅰ　子どもの生活のなかでの児童文学

幼年童話の問題と創作……早船ちよ……五
一年生の童話教室……中野美智子……四九
子どものせかい……法元豊子……七五
童謡、このよきもの……浦かずお……八五
作家研究　新見南吉論……清水和子……一〇五
わたしたちの児童文化運動……山本康裕……一三九

Ⅱ　新しい児童文学の創造について

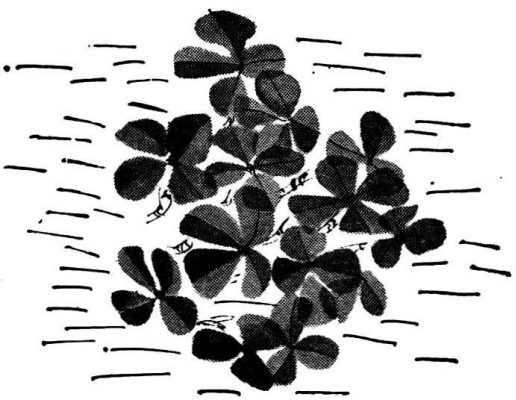
笑いとユーモアの新児童文学……北原真一……一五三
ロマンチシズムの新しい児童文学……柾木恵美子……一六九
新しいリアリズムの児童文学……村山　宏……一九七
作品におけるリアリテ……如月嘉継……二一三
市民精神は現代にどうかかわりあうか……湯浅清四郎……二三一
心身障害児問題と児童文学……加藤　明……二四九
民話の再創造について……井野川潔……二六五

装丁　いわさきちひろ
カット　青木昌三

幼年童話の問題と創作

早船　ちよ

幼児のことば
ともちゃん日記より
—零歳から二歳
ことばと意識
—二歳半になると
幼年文学いぜん
—四歳の反抗
絵本のない保育
終りの章



＊　幼児のことば

昭和三十年ころだったろうか？

――二、三歳向きの童話を書いてください――と、月刊幼児雑誌出版社に頼まれたとき、その「二、三歳向き」という言葉に、ひっかかるものを感じた。

わたしは、昭和十年ごろからそのころまで、二十年らい、幼児童話を書いていた。わたしは、幼児童話というか、幼年文学というか、そういう話をつくるのが性にあっていて、好きである。いっぽうでは、そこまでの二十年も、それにつづく十年も、そのときどきに、幼児のママでもあったので、幼年文学は、わたしの生活と、いつも密着したところにあった。

学齢前の幼稚園雑誌には、毎月のように、何か書いていた。――しかし、「二、三歳向き」という低い対象年齢を、はっきりと打ちだして書いてほしいといわれたのは、このときがはじめてだった。そのころ、すでに、「二、三歳向き」をねらっての月刊雑誌が市販されだしていたのだ。

――二、三歳向き童話という、平均的なことばで書かれた、平均的な作品なんて成立するだろうか？

そのとき、わたしには、さまざまな疑問がつぎつぎに浮かんでくるのだった。

そのころ、幼児絵本や幼稚園雑誌も、敗戦後すぐの混乱期から十年間のあいだに、印刷も、造本も、いちだんとよくなってきていた。幼児絵本も、幼稚園雑誌も、数種類でていて、各社で競争で、おまけなどもつけている。そこで、内容も、年齢べつに、「二、三歳児」、「三、四歳児向き」、「四、五歳用」というように、三段階ぐらいにわけて、対象年齢を、はっきり出すようにしたのであろう。多分に、コマーシャル・ペースの発想であるが、そんなら、その時期「幼児のことばと幼年文学」は、どう考えられていたろうか？

学問としてのそれなら、医学的にも、幼児心理学の面からも、保育、幼年教育、文学のそれぞれを総合して、体系だてて考えられねばならないだろう。

「幼児のことばと、幼年文学」は、戦後の映像文化、マスコミの流動的な問題状況のなかで、さまざまな問題を抱えながら、文学者、作家からも見すごされてきたようだ。

そういったようなことを、「二、三歳向き童話」ということばから、考えさせられた。

赤ちゃんの成長がびっくりするほどすばらしいのにつづいて、二歳から三歳への一日一日は、目をみはるような発見の連続である。

――一日に、三つも四つも単語をおぼえていく二歳。トーツ、ターツと、数を知るようになっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

た二歳半の目は、物の質・量へも向けられていく。

そんな、すばらしい時期を、ひとからげに、二、三歳といってしまっていいのだろうか。一歳から二歳までの一年間と、二歳から三歳までの一年間を、おなじメーターではかれるものだろうか。おなじ一年間ではあっても、知能の発達も、からだの成長も、延長線上では考えられない。そのときどきの特徴や、環境や体質による個人差がありすぎる。厳密にいえば、何歳児という概念でしめくくろうとするとき、幼児は、ひとりのこらず、消えて見えなくなってしまう。

——そんな幼児にむかって、どんな話をしてあげたらいいのだろう。日本じゅうの、その年齢の幼児に、共通理解できる童話なんてあるのだろうか？

——幼児文学の成立いぜんに、まず幼児のことばから知らなければ……。

——そのときどき、さまざまな環境、発達段階にある幼児を、わたしは、つかまえているだろうか。そのことばを、よく知っているだろうか。

ちょうど、そのころ、工業デザイナーの弟が、なかまとパミールへ旅行したいという、計画に熱をあげていた。わたしにも、行こうという。

——ねえ、片道の旅費さえつくれば、とにかく行くだけは行けるんだから、いっしょに、パミ

ールへ行こうよ。帰りか？　帰ってなんかこなくたっていいじゃないか。
ふふん……と気のない笑いで、わたしは、
——そんなこといったって、ことばは、どうするの。パミールのことばは、何語なの？
——人間語さ。ことばなんて、要するに、吠えかたの問題だろう、イヌやネコとおなじにさ。なまじっか、文化国家の紳士やレディのことばなんか、知らないほうがいい。そのほうが通りがいいんだ。
——吠えかた？　ね。
——あかちゃんとだって、大人は、話すじゃないか。ことばを知らないあかちゃんと。
——そうね、原始のころ、人間はことばを知らず、乳児のように、叫んだり、吠えたり、泣いたりして意志を通じあったんでしょうね。
わたしは、幼年文学にくっつけて考えずにはいられなかった。文学いぜんのことば。ことばいぜんの、吠えるという原点にまで立ちもどって考えねば、と思うのだった。

乳児の呼びかけは、「あーう！」、「おうおう！」、「ふえー」などという、ことばにならない発声音からはじまる。

ママは、その発声音で、乳児の気持をききわけることができる。その発声音を「赤ちゃん語」といったり、「あんた、どこの国のことばで話してるの」と、きき返したり、からだとことばの両方でこたえる。だっこしたり、ほおずりしたり、赤ちゃん語をまねて、「おう、まんま、まんま」と、いったり、「いい子、いい子。おなかすいたでしょ、ほうら。」

からだの動きや、だっこばかりでなく、母乳のしずくが、ちゅんと、乳児の口もとへとんでいく。それすらも、話しかけの返事だったりする。

「おう！　ぱい、ぱい」

乳児は感激し、目をかがやかす。

「ことば」とは、表現の媒体であるならば、より具体的なだっこ、ほおずりの動作や、より直接的な母乳のしずくは、表現そのものによる働きかけ、話しかけだろう。

「吠える」ことからはじまって、より具体的な接触をまじえつつ「吠えかた――ことば」が生まれ、共通理解としての、ことばによる対話へ発展する。

乳児から二歳ぐらいまでのこの間、対話のことばは、行きあたりばったりで、文章にはなりにくい。幼児文学成立いぜんの時期である。そのころのことばを、わたしは、日記帳にメモしておいたことがある。長男が、二歳のときのことばです。

ママ・ズロン　（ママのスカート）
ハンカンジー　（サンカクジョウギ）
ショウユ、オタオタ、オタオタ　（びんから、しょうゆさしに注ぐ音）

「吠えること」を卒業して、「ことば」らしいものへ発展する時期のもので、昭和十一年のノートである。

戦後二十何年たったいま、幼児の生活環境や問題状況は、そのママの世代とくらべても、大きく変わってきている。それを見すごしたり、見られなかったりして、童話をかいたら、時代ばなれの作品になってしまう。なによりも、子ども不在の、子どもにえんのない作品を、子どものためにかいているつもりでは、どうしようもない。そうならないためには、幼児のことばを知ることが、だいじである。

そこでわたしは、一九六八年第一回夏期児童文学講座のあとで、つぎのような呼びかけをした。

――児童文化の会の書き手の集団のテーマとして、幼児のことばの記録を、できるだけ、たくさん作ってみよう。

――いままでの研究や調査で、「乳幼児が、ことばを体得する過程」を社会的に、幅ひろく追跡し、文化や生活、状況との相関関係のなかで見ていく作業は、なされていない。実作者の立場か

らは、なお、なかった。

——よしんば、あったとしても、過去のそれは、いま、べつの観点から、やり直しの時期がきているのだ。書き手(実作者)として、大いに問題意識をもってほしい。

そんなふうなことを、個人的にも何人かよびかけたり、協力をたのんだりした。

——ある年齢、ある生活条件の幼児を対象に、日常的な継続調査のゆっくりした作業として、何年か、つづける覚悟で、なるだけおおぜいの手で、データーをとりましょう。

それが、体系だてての学問だったら、方法と方向——その拠って立つ基盤なども、やかましい問題になるのだろうが、わたしたち実作者は、新しい児童文学の創造のために——ぐらいののんきな目標でやってみればいいのだろう。

——データーがでたら、それをテキストに話しあったり、作品の参考にしたり、さらに、この作業をすすめていく資料にしよう。そのうえで、また考えて、方法も工夫していくといったように段階的に、やってみましょう。

——ママや、児童文学者ばかりでなく、できれば、保母や教師も参加してほしい。幼児語を、保育所・幼稚園や学校などの集団のなかでとらえると、家庭とはべつの面ができるでしょう。集団、または群の幼児に光をあてることになるだろう。

――言葉の記録、それは、社会状況を反映した生活の記録であり、成長の記録であること、そして保育、幼児教育の記録でもある側面も、おさえておきたい。

こんな呼びかけに対して、すでに、生活記録ノート「ともちゃん日記」をとっていた柴田義子さんが、「言語生活第一歩」とサブ・タイトルをつけたデーターを提供された。おどろいたことにもうひとり、梶田典代さんが、学級通信「たんぽぽ」のなかで、小学一年生の、ことばの記録をとっておられた。

まず、柴田義子さんの抜き書きを紹介しよう。

＊　ともちゃん日記より

木枯しが吹き始めた十一月、ともあきちゃんは茨城県の田舎街の病院で生まれた。パパは三十一歳。東京に通勤する会社員。ママは二十九歳、家から歩いて十五分ほどの女子高校の先生である。

家は、六号国道ぞいの土手下。さいきん、ガードレールができたので、ダンプカーが飛びこんでくることだけはなくなった。車の往来が激しく、交通事故多発地帯である。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo